

雪国

[1957年 東宝]



(白黒/スタンダード/モノラル/133分)

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という有名な冒頭ではじまる川端康成の不朽の名作小説を映画化したもので、文芸映画を得意とした豊田四郎が監督した。日本画家の島村(池部良)は、戦争へと突き進む暗い世相のなかで、一年前に越後湯沢の温泉場で逢った芸者・駒子のことが忘れられず、再びその温泉場を訪れる。二人は互いに惹かれ合うが、駒子は義母とその息子を養うため旦那を持っており、島村は東京に妻子がいた…。

【スタッフ】

原作 川端康成
脚色 八住利雄
監督 豊田四郎
撮影 安本淳
照明 森茂
録音 藤好昌生
音楽 団伊玖磨
美術 伊藤薫朔

【出演者】

島村	池部良
駒子	岸恵子
葉子	八千草薫
葉子の弟・佐一郎	久保明
高半旅館の番頭	田中春男
女中おたつ	浪花千栄子
駒子の実母	浦辺粂子
女按摩	千石規子
駒子の養母	三好榮子
芸者勘平	市原悦子

徐々に惹かれ合ってゆく島村と駒子の心理が、熟練した豊田四郎の細やかな演出で表現される。また、雪国の空気と生活感がにじみでる映画美術も、本作を格調高いものにしてている。岸恵子は本作の製作中に、フランス人映画監督のイヴ・シャンピとの婚約を発表して時の人となり、封切と時を同じくしてフランスへ旅立った。原作小説は1965年にも、岩下志麻・木村功主演で再映画化されている。

伊豆の踊子

[1963年 日活]



(カラー/シネマスコープ/モノラル/87分)

川端康成による有名な同名小説の4度目の映画化である。日活では初めての試みで、当時同社の若手スターだった吉永小百合と高橋英樹が主演した。宇野重吉扮する大学教授の回想という形式を採っているのが特徴で、現在と過去をカラーと白黒で使い分け、現代の女性と回想中の踊子を吉永に二役で演じさせたことについて、西河克己監督はこれまでの『伊豆の踊子』と違った試みをやりたかった、と述べている。原作中の有名な台詞「いい人は、

【スタッフ】

原作 川端康成
脚色 三木克巳
脚色・監督 西河克己
撮影 横山実
照明 河野愛三
録音 沼倉範夫
音楽 池田正義
美術 佐谷晃能

【出演者】

薫/少女	吉永小百合
川崎	高橋英樹
栄吉	大坂志郎
お芳	浪花千栄子
お清	十朱幸代
お咲	南田洋子
人夫頭	郷鏗治
鳥屋	桂小金治
紙屋	井上昭文
学生	浜田光夫
老教授	宇野重吉

いい人ね。」を意図的にシナリオから削除したことに、新しい「踊子」像を作ろうとした野心が表れているが、田中絹代出演による初の映画化(1933)や、後の映画化と比較しても、全体としてはセンチメンタルな作品に仕上がっている、と言えるだろう。川端はこの作品のロケーション撮影を訪れているが、完成した作品について川端が各地で高い評価を公言したので、西河監督がかえって戸惑ったという逸話も残っている。

五番町夕霧楼

[1963年 東映(京都)]



(カラー/シネマスコープ/モノラル/137分)

田坂具隆監督は戦前からのキャリアをもつ名匠の一人であり、『路傍の石』、『五人の斥候兵』(ともに1938)などの名作で広く知られている。地味ではあるが、堅実な作風はかねてから定評のあるところであるが、この作品においてもその長所を随所で認めることができるだろう。遊郭の佇まいや内部の造りなど、物語の背景に対して、田坂監督ならではの配慮がなされており、表現に厚みをくわえている点も見逃すことはできない。脚本家の鈴木尚之によれば、旦那と恋人のあいだで揺れる女の身体と

[スタッフ]

原作 水上勉
脚本 鈴木尚之
脚本・監督 田坂具隆
撮影 飯村雅彦
照明 川崎保之丞
録音 内田陽造
音楽 佐藤勝
美術 森幹男

[出演者]

片桐夕子	佐久間良子
榎田清順	河原崎長一郎
女将 かつ枝	木暮実千代
夫 伊作	進藤英太郎
夕子の父 三左衛門	宮口精二
久子	丹阿弥谷津子
敬子	岩崎加根子
竹末甚造	千秋実
おみね	岸輝子
鳳閣寺和尚	千田是也
寺男	織田政雄
照千代	木村俊恵
お新	赤木春恵

心を描く官能的な場面の演出に先立ち、田坂は主演の佐久間良子に丁寧なメモ書きを与え、長く対話することで主人公の気持ちをすくいあげた演技指導をしたという。善良な遊郭の女将や娼妓といった設定は、この場合、意図的なものであり、そのことによって主人公・夕子の薄幸がより純粋に、観客に印象づけられるといえるだろう。「キネマ旬報」ベストテン第3位。田坂には同じ水上勉原作の映画化作品に『湖(うみ)の琴』(1966)がある。

五瓣の椿

[1964年 松竹(大船)]



(カラー/シネマスコープ/モノラル/163分)

山本周五郎の同名小説を井手雅人が脚色し、川又昂が撮影、野村芳太郎が監督にあたった芸芸大作。父の恨みを晴らすために、好色な母と関係した男達を誘惑し、一人ずつ殺害していく娘おしのの復讐を描く。その男たちは、三味線引きの蝶太夫、婦人科医、札差屋の伴、芝居茶屋の出方、袋問屋の主人とさまざまだが、死体の傍らにはつねに一輪の椿が残されていた。この陰惨な物語を、岩下志麻

[スタッフ]

原作 山本周五郎
脚色 井手雅人
監督 野村芳太郎
撮影 川又昂
照明 三浦礼
録音 栗田周十郎
音楽 芥川也寸志
美術 松山崇
// 梅田千代夫

[出演者]

おしの	岩下志麻
岸沢蝶太夫	田村高広
海野得石	伊藤雄之助
むさし屋喜兵衛	加藤嘉
おその	左幸子
菊太郎	入川保則
青木千之助	加藤剛
香屋清一	小沢昭一
佐吉	西村晃
丸梅源次郎	岡田英次
お孝	山岡久乃

は内に気丈さと気品を湛えた演技で好演し、代表作の一つとした。また、この作品の場合、松竹映画を支えてきた技術陣の力も見逃すことはできない。とくに、主人公の心理描写に赤、白、黒の色彩を効果的かつ象徴的に用いた独自の撮影は、川又昂カメラマンの力量を発揮したものであった。